赤と紫の旗の下に

現代フィリピンの女性運動に関するノート

ジュディ・タギワロ

Laya: Feminist Quarterly, Vol.2, No.4, 1993. LAYA Women's Collective, Quezon City, Philippine から訳出。原題は "Marching Under The Red and Purple Banner: Notes on the Contemporary Women's Movement in the Philippines"。

フィリピンはかつて三世紀にわってスペインの支配下に置かれ、約半世紀にわたって米国による直接の植民地統治を受けた。この植民地主義の歴史が現在のフィリピン社会の経済的、政治的枠組を形作っている。すなわち半植民地、半封建の社会である。スペインによる植民地支配は、封建的な土地所有制度、ハシエンダ制、そしてローマ・カトリック教会などの社会制度をもたらした。米国は「平和のための戦争」の名のもとに50万人以上のフィリピン人を虐殺した後、天然資源を奪い、民衆を安価な労働力として搾取し、また米国の商品の輸入を自由化することにより、その資本主義的な支配を固めた。また米国はハシエンダ制を維持して大地主に相当規模の輸出割当とうま味のある政治的地位を与えた。この米国支配の仕組みは、今日も輸出志向型で債務依存の経済と従属的な政治構造として遺されたままだ。

フィリピン女性たちはこうした外国による支配によって苦難を強いられてきた。スペイン植民地支配はカトリック教会を通して進められたが、それは女性を家庭と教会に閉じ込め、従順さを求める文化を植えつけた。米国は女性を含む普通教育を導入したが、それも植民地当局と大資本を支える専門職と聖職者を養成するものでしかなかった。大多数のフィリピン女性たちは農村で不払労働に従事し、工場で働く一部の女性たちもそもそも低い男性労働者の賃金からさらに40%から70%減額された賃金しか受け取ることはできなかった。この外国勢力と現地支配者によるフィリピン民衆の搾取と従属がフィリピンの歴史における一方に存在し続けている。そして他方にはこの外国支配と現地協力者に対する民衆の抵抗と闘争が続けられてきた。

女性たちはこれらの闘いに市民としての一人として、また自らが属する階層の一員として参加してきた。女性たちはこの闘いのなかで、社会が自らに課してきた制約を越えて解放への歩を獲得してきた。スペイン植民地支配とアメリカ帝国主義と闘う革命運動に多くの女性たちが参加し、公式のフィリピン史の叙述のなかでも個々の女性たちの貢献が記されている。それは新しい世代の女性革命家たちに今なお闘いへの刺激を与えている。

だが女性解放を意識的に目指してジェンダー的要求が運動のなかで掲げられるようになるには、1970年代まで待たねばならなかった。1970年代を前にして民族民主主義派の青年組織ー民族主義青年同盟（KM）と民主青年連合（SDK）ーが組織化され、経済危機が深まるなかで、かつてない激しいデモが繰り広げられた。そして、その弾圧と抵抗のなかから1970年の「第1四半期の嵐」が生み出された。すでに知られているように「第1四半期の嵐」は、フィリピン民衆が抱える根本問題を分析・暴露し、民族民主主義運動によるその解決への道をはじめて広範な人々に提起することになった。これ以降、無数の学生活動家たちが農村部やマニラ以外の都市へと向かい、労働者と農民の中に入って組織化を始めた。それは現代のフィリピンの民族運動、また大衆的な民族民主主義運動の基礎を築いた。

1970年代の女性運動

この民族民主主義運動は、女性の解放をその革命綱領のなかに不可欠かつ極めて重要な領域として措定したフィリピン史上最初の運動である。このことを条件としながら、根本的な社会構造の変革とジェンダー的平等の実現とを結合した最初のフィリピン女性運動が生み出されることとなる。

「第1四半期の嵐」以前から民族民主主義派の青年組織は、運動に女性たちを引き入れる必要性を理解していた。この理解は、伝統的な革命運動（主にフィリピンの活動家たちが理論的、実践的に多くを学んでいた中国とベトナムの革命運動）の基調から得られたものだった。つまり勝利を獲得するためには女性たちの参加が死活的に必要であり、また女性たちは階級抑圧のみならず男性支配によっても抑圧されている、という内容である。より多くの女性たちが運動に参加し青年組織のなかに女性部が設置された。その時点では女性たちの意識の発展はそれまでの民族的、階級的な運動の枠組から出るものではなかった。

1970年、マキバカ[1]が結成され、フィリピンに女性運動が登場する。主流メディアも報じたように、その結成は当時、西側諸国で広範に巻き起こっていた政治運動の流れを汲むものであった。様々な青年組織に属していた女性活動家たちが集まり、結束して女性自身による闘いを開始した。特徴的だったのは、主要な美人コンテストの前で阻止線を張って抗議する行動を行って、その年のはじめにロンドンで行われた女性たちの行動に呼応しようとしたことだ。この行動は、それが女性によって行われたという点だけでなく、美人コンテストを通した女性の商品化という女性に独自の問題を取り上げたという意味で画期的であった。こうした問題は、それまでの広範な運動のなかでは取り上げられてこなかった。

さらに重要なことは、この大衆行動のなかから、複数の女性活動家たちがそれまで参加していた男女混合の組織を離れ、マキバカに結集してこれを緩やかな連合組織から一つの女性団体として再編することを決定したことである。マキバカの政治綱領は、本質的には民族民主主義的な立場に立っていた。すなわち、フィリピン女性の解放は、封建制と外国支配に対する民衆全体の闘いに自らが参加することと固く結びついているというものである。

別個の組織をつくるという決定は、直接的には女性たちが男性から自立して自分たち自身の組織化能力や自己決定の能力、自分たちの意見を自由に文章にする技術を高めるためには独立した組織が必要だという声に素朴に応えたものであった。だがそれはマキバカの女性たちと主要な青年組織の指導者たち（多くは男性だが女性も含まれていた）との間に激しい論争を呼ぶことになった。後者は女子学生たちが男女混合の組織にすでに参加しており、組織内には女性部もあって女性の問題を取り扱うことができるのに、なぜあえて女性組織が必要なのかと問いただした。また彼らはマキバカの最初の行動に影響を与えた「ブルジョワ・フェミニズム」の危険性をあげて警告した。当時、フィリピンの活動家たちはマス・メディアによって伝えられるごくわずかな情報のほかには、西側の女性運動についてほとんど情報をもっていなかった。メディアのなかではフェミニズムは性の解放を主な要求とする熱狂的な反男主義の同質的な潮流として描かれていた。

こうした論争にもかかわらず、マキバカは女子学生による民族民主主義派組織として存続し、1972年の戒厳令布告まで反帝国主義、反封建主義、反ファシズムを掲げて大衆行動に参加し続けた。

マキバカの特徴は、労働者階級の女性たちが階級とジェンダーという二重の搾取を受けていること、また女性は民衆運動のなかで一般的な課題と個別的な課題の両方に取り組むことができる、という立場を強くか

1　訳者注：MAKIBAKAは「新しい女性の自由のための運動」という意味のフィリピノ語の頭文字をとったもの。またフィリピノ語でMAKIBAKAは「闘争」を意味する。

つ詳細に主張したことにある。これは彼女たちが女性抑圧の根拠について理論的な検討を行い、また海外の革命運動での女性たちの経験について一定の調査と研究を行ったことを示していた。

本質的には階級的な視点に立つマキバカやその他の女性活動家たちは、マルクス主義や革命運動の文献に依拠して女性たちの疑問に答えようとした。エンゲルスの『家族、私有財産、国家の起源』、レーニンの『婦人論』、女性問題に関するレ・ドゥアンのパンフレットや毛沢東の言葉などを用いながら、女性の従属についての理論的説明がなされた。その枠組は階級分析を基礎とし、経済構造に抑圧の根源を見出すものであった。労働現場でも家庭内でも主要矛盾としての資本主義（独占および買弁資本）と封建制が女性の従属を生み出し、これを固定化し、そしてそこから搾取している。だからこの従属を終らせるためには、女性がその変革のための政治運動に参加することが鍵となる。

マキバカはそれを実践するために、女性の声や立場をデモや集会に反映させた。集会で女性が必ず発言者に加わるようになった。そして帝国主義、封建主義、官僚資本主義がいかにフィリピン女性を抑圧し、搾取しているかを訴え、フィリピン民衆の半分を占める女性がこの運動に自分たちの力を結集させるべきだと呼びかけた。米国で左翼的な女性たちが、こうした状況を「形式だけの平等主義」だと批判したのとは異なり、フィリピンの女性活動家たちはこれを運動の発展と捉え、自分たちの聴衆を教育していく機会として利用した。

女性組織としてマキバカは、それまで男女混合の青年組織のなかでは男性がやっていた仕事を女性メンバーたちにやらせた。デモのときの防衛係、横断幕やプラカードの作成、謄写版での印刷作業、支部の組織化や会議の運営などである。この時期とくに意義深い取り組みとなったのは、1971年3月8日に行われた、貧困と闘う国際女性デーの開催である。これはフィリピンで最初の国際女性デーの取り組みとなった。マキバカとその他の組織の女性活動家たちは、女性たちが置かれた貧しく無力な状況を終らせる道を探るために、協力してその成功のために尽力した。

こうした女性たちの努力が運動全体に大きな影響をもたらしたことを示す一例がある。仲間の男性活動家たちが、自分たちの学校やコミュニティーで女性たちに呼びかけてミーティングを組織し、そこにマキバカの活動家を招いて発言してもらい、マキバカの支部を設立していったのである。マキバカは当時マニラを活動の場としていたが、こうした活動家たちの尽力により各地に支部が発足し、全国組織へと発展していく。

女性問題に関する取り組み以外の点では、マキバカの政治的性格と内容は他の青年組織と変わるところはない。学生、青年を教育し、組織し、立ち上がらせる、ということが共通した課題である。だがマキバカはそれにとどまらず、マニラの貧しい都市スラムに暮らす母親たちのなかへと活動を広げた。デイケアセンターをつくり、母親たちに育児講習会を開いた。そして同時に、女性を性的な従属物に貶める美人コンテストやファッションショーに反対する活動を呼びかけた。

この時期の女性運動の地平と限界は、当時のより広い民衆運動全体の地平と限界によって条件付けられていた。つまり都市部を拠点とし、学生や青年が基盤であったということである。当時の女性運動の活動家たちは、もともと民族と階級の解放を信条としていた大学生たちであった。女性解放は民族の独立と真の民主主義の達成によってこそ実現されるとの定義のうえに立って、彼女たちは女性解放を民族民主主義運動の政治綱領の一部として位置づけた。この女性たちの実践と研究が、フィリピン社会における女性抑圧とその解放に関する理論的前進を切り開いた。だが、それは本質的に言って民族解放闘争と階級闘争という枠組のなかに留まったものであり、なぜ労働者階級の女性たちが経験する抑圧が同じ階級の男性の抑圧よりも過酷なのか、ということそのものを説明するものではなかった（できなかった、というべきか）。

この限界は以下に示すような当時の条件によって規定されていた。

1．学生・青年を主体とする当時のフィリピンの運動の理論的、実践的な未熟さ。彼らが依拠したマルクス主義の理論と実践は、中国とベトナム、および部分的にはソ連における革命の勝利、またフィリピンにおける革命の敗北という経験に立脚して構成されていた。運動の主要な課題は、フィリピンの各階級を取り巻く社会条件を明らかにし、運動の全般的な分析と要求を宣伝しながら、組織化と闘争の経験を獲得することにあった。政治暴露の機軸は、アメリカ帝国主義と国内の封建主義が勤労階級と諸階層（先住民族、学生・青年、女性）を搾取し抑圧しているということに置かれた。したがって、具体的な搾取と抑圧の個別の形態をフィリピンの文脈のなかで分析しきるには、さらに数ヵ年に渡る革命的実践が積み上げられる必要があった。

分析と要求が一般的すぎるという限界は、女性運動に限られたことではなかった。労働組合も農民運動も、自決権を求める先住民運動やその他の運動も、そうしたフィリピン特有の限界を抱えていた。

2．初期の女性運動活動家は学生たちであり、彼女たち自身、労働者階級女性が抱える二重の抑圧を直接には経験していなかった。労働者や農民の生活についてわずかな知識しか持たない彼女たちは、労働者階級の女性たちは賃労働という経済活動に従事しており、また家族は生産手段を所有しないのだから家族内に女性の抑圧はない、とするエンゲルスの理論をたやすく受け入れた。

革命運動のなかに女性解放の可能性を生み出したのは、部分的ではあれ伝えられた他国の女性たちの運動に関する情報だった。そして個人のレベルでは、女性活動家たち（彼女たちはまだ家事の責任も負っていなかった）はフィリピン社会の伝統的な縛りを越えて女性たちが政治運動に参加しはじめたことに解放感を感じている状態だった。

3．当時すでに西側ではフェミニストたちがマルクス主義的な「女性問題」へのアプローチへの批判を開始していた。だがフィリピンの活動家たちはこのことに関して十分な知識をもっておらず、そのことが女性解放に関する伝統的な見解を固守する傾向を強めさせた。成長するフェミニズム運動の経験から学ぼうとしないこの誤りは、より深められたフェミニズムの著作に触れる機会がなかったこと、また海外のフェミニスト・グループとの接触を持たなかったことに原因の一部があったといえる。また男性との断絶や対立として一面的に歪曲されたフェミニズム像、これは今日でもフィリピンの女性活動家の間に存在しているが、にも原因があるだろう。

1980年代の女性運動

1972年の戒厳令布告は、生まれたての民族民主主義派の合法諸組織を地下へと追いやった。マキバカと他の青年組織は非合法化され、そのメンバーたちは非公然革命運動に加わり、農村部と都市部の民衆のなかでファシスト支配に対する武装抵抗闘争を組織した。こうして活動家たちの努力は各地域へと集中された。マルコス独裁を追い詰める公然たる全国的闘争が出現するにはさらに10年以上を経ることになる。

農村部での革命運動に女性たちが参加したことは、それまでの慣習的なジェンダー役割を大きく変化させた。女性たちがゲリラやその他の政治活動に参加し、男性たちが洗濯や料理を行うなかで、彼／彼女らが発するジェンダー平等という言葉はそれまでのどんな運動の宣言文よりも力強いものとなった。こうして戒厳令以前は主に都市部で広められた女性解放の理念が農村部へと広がっていった。男性たちに占められていた農民団体とは別に農村女性の組織が結成された。さらに発展した地域では、村の会合や文化発表と合わせて国際女性デーの取り組みが行われた。

1970年代後半になると女性解放運動の入門書が作られ、農村部で広く論議されるようになった。そこでは農村女性たちを取り巻く具体的な抑圧の問題が取り上げられ、家族関係を民主化する必要性が述べられた。

また農村女性運動は「革命運動全体のために闘い、これに従うもの」とされ、その主要な課題は真の農地改革に向けた闘争と武装闘争への全面支援とされた。

一方、都市部では体制側の社会機構内部にいる先進的な個人たちの協力をも得ながら、限定的な経済要求を掲げるかたちで合法組織がつくられていった。都市部の女性たちは学生運動、労働組合、都市貧民組織へと組織され、そこで新しい女性指導者たちが生み出されていった。女性独自の運動が新たに登場するのは1983年まで待たねばならない。

1983年、重大な経済的、政治的危機がフィリピンを襲った。その一因は国際金融機関の指導による破滅的な経済政策の実施にあり、また他方ではマルコス政権下での汚職の蔓延にあった。反政府行動が急速に発生し、それはマルコスの第一の政敵ベニグノ・アキノ・ジュニアが暗殺され、人々が怒りを爆発させるなかでさらに拡大していった。1983年の最後の4ヶ月間を反政府闘争が席巻した。

民主的な統治を求めて様々な組織が作られた。労働者階級、都市貧民、中産階級、エリート層などそれぞれのなかから女性団体が創られた。マルコス独裁に反対することを一致点として、それら異なる階層の女性団体が手を結び、1983年10月28日「女たちの抵抗の日」が開催された。戒厳令布告以降、はじめての大規模な女性の行動となった。そのなかからガブリエラが結成されることになる。ガブリエラがその後の二年間にわたってマルコス政権打倒に至るまで活動を進めたことは、現代フィリピンの女性運動にとっての新しい時代を切り開くものとなった。

学生と青年を主体としたマキバカとは違い、ガブリエラは諸階級、諸階層の連合組織である。そこにはマルコスとその取り巻きたちによって打撃を受けた政治エリートのグループに属する者たちもいたし、人権侵害や女性を性的従属物にすることに強く憤る宗教組織の女性たちもいた（同時に彼女たちは中絶に強く反対してもいた）。海外の理論動向に詳しいフェミニストの知識人たちもいた。だがガブリエラの支柱となっていたのは、労働者や農民、都市貧民出身の闘う女性たちであった。彼女たちは民族民主主義綱領を支持する人々であり、また経済的な搾取と国家暴力にもっとも過酷に晒されている人々でもあった。

ガブリエラは、様々に異なる政治的利害をもった女性たちが反独裁という目的において連合した組織であった。その活動や声明のなかで、ガブリエラは政府の政策が女性たちにどのような影響を与えているのかを暴露した。観光産業の問題、バターンの原子力発電所、輸出加工区、米軍基地と買売春、女性や子どもを脅かす軍事化と人権侵害。ガブリエラはこうした課題について調査を行い、その問題化のために努力した。異なる階級、異なる立場の連合であるというその組織性格ゆえに、こうした取り組みを通してガブリエラは、女性に特殊な問題としての側面を重視すべきだとうことを強調した。（ただし中絶と離婚の問題については、組織の分裂を引き起こすために取り組まなかった）

1985年のNGO女性フォーラム1には8人の代表を派遣して、多くの成果をえた。これを通して、民族民主主義派の活動家を含めガブリエラの女性たちは、世界中の様々なフェミニズム潮流に直接に触れ、また女性団体が世界的に取り組んでいる諸課題に触れることとなった。このフォーラムとそれに引き続いて国内外で開催された女性連帯のための種々の国際会議は、女性活動家とフェミニストたちの交流を生み出し、フィリピンの女性たちにフェミニズムに関する新しい知識と経験を与えた。

しかし、階級の違いを越えてガブリエラに結集した女性たちのシスターフッドは、1985年末には終わりを告げる。マルコス大統領による繰上げ大統領選挙の呼びかけに対し、これに参加すべきか否かをめぐる議論が発生する中で、政治的、階級的立場の相違が明白となり組織は分裂した。上層および中産階級の女性たちはガブリエラが選挙に参加するべきだと主張した。草の根の諸組織は不正選挙になることは不可避でありボイコットすべきだと主張した。ボイコット方針が多数を占め、これに不満をもつ諸組織がガブリエラから

1　訳者注：国連女性の十年（1975～1985）の最終年にケニア・ナイロビで行われた第三回世界女性会議にあわせて開かれた。

脱退した。その後、「ピープル・パワー革命」の四日間だけ共同行動として復活したものの、コラソン・アキノ大統領の就任により分裂は決定的となった。アキノ支持者はその後も政府機関内部で活動する道へと進み、新しい大統領の政策を支えた。他方、ガブリエラは自立した大衆運動によって女性の要求を実現する道を進んだ。

以来、ガブリエラは民族民主主義運動と共同する女性大衆運動の政治センターとして機能している。広範な民族民主主義運動との協力によって、ガブリエラはフィリピンのなかで最も抑圧された大多数の女性たち、すなわち農民、労働者、都市貧民の女性たちの組織でありつづけている。こうしてガブリエラはその結成からわずかの間にフィリピンで最大の全国的女性組織として定着した。

海外の女性組織との交流を通してガブリエラは、マルクス主義の経済的、文化的な分析を越えて女性の従属を分析しようとする西欧フェミニズムに対して以前よりも開かれたものとなった。また他方では、革命に勝利した国々で家父長制が堅固に残存しているという事実が伝えられるなかで、ジェンダー的な課題をその他の民族的、階級的な諸課題とは独自に取り扱うことの必要性が強調されてきてもいる。自分たちの女性抑圧の問題への取り組みが（民族的、階級的な課題と比べて）遅れているとの認識に基づいて、ガブリエラはフィリピン女性が抱える問題と状況に関する分析を深め、その解決の方法を探るための適切な枠組を設定することを緊急の課題としている。また同時に、具体的な取り組みとして女性のリプロダクティブ・ライツや身体の自由、レイプや妻への暴力、性的人身売買などの女性への暴力などの課題にも取り組んでいる。組織的なネットワークのなかに、売春女性とレイプ被害者のための救援センターも設置した。また農業問題と農村女性、とくに農地改革問題の影響についての調査も行っている。

現代フィリピンの女性運動は、それが生まれた戒厳令以前の状態からすでにかなりの発展を実現してきた。その成果の一つは、諸階級の連合体としてのその組織的実態にあり、またそれが地理的な広がりを持って組織されている点にある。それはまたこの20年間におよぶ民族民主主義運動の顕著な発展と直接的に結びついたものでもある。

さらに重要なことはもともと民族民主主義運動が言及してきた農地改革などの一般的な課題のなかに女性の視点を加えるという枠組を越えて、女性運動が様々な個別的課題に取り組む能力を獲得していることである。これを通して女性運動の側が民衆運動全体の形成に影響を及ぼすようになっている。そのひとつとして、革命的な民衆組織の連合体、民族民主戦線（NDF）が1990年に採択した政治綱領をあげることができるだろう。そこでは公的および私的な領域での女性抑圧の特殊な形態を踏まえて、革命政府が女性解放を実現するために実施すべき具体的な政策が記されている。特に離婚の権利、女性の身体と生殖に関する自己決定権が含まれている点は重要である。

象徴的に言えば、フィリピンの女性運動はマキバカが掲げた赤旗（それは他の諸組織と同じ色だ）と、他の諸組織と一緒に進みながらも堂々と掲げられてきたガブリエラの紫の旗のもとに進んできたのである。

【河合大輔　訳】